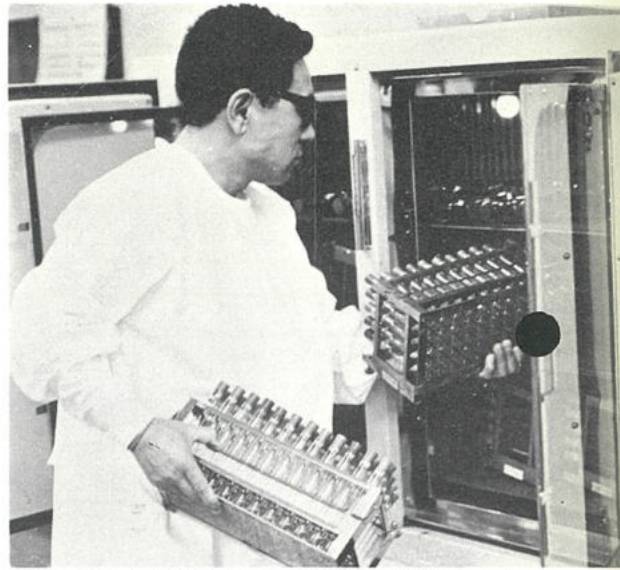
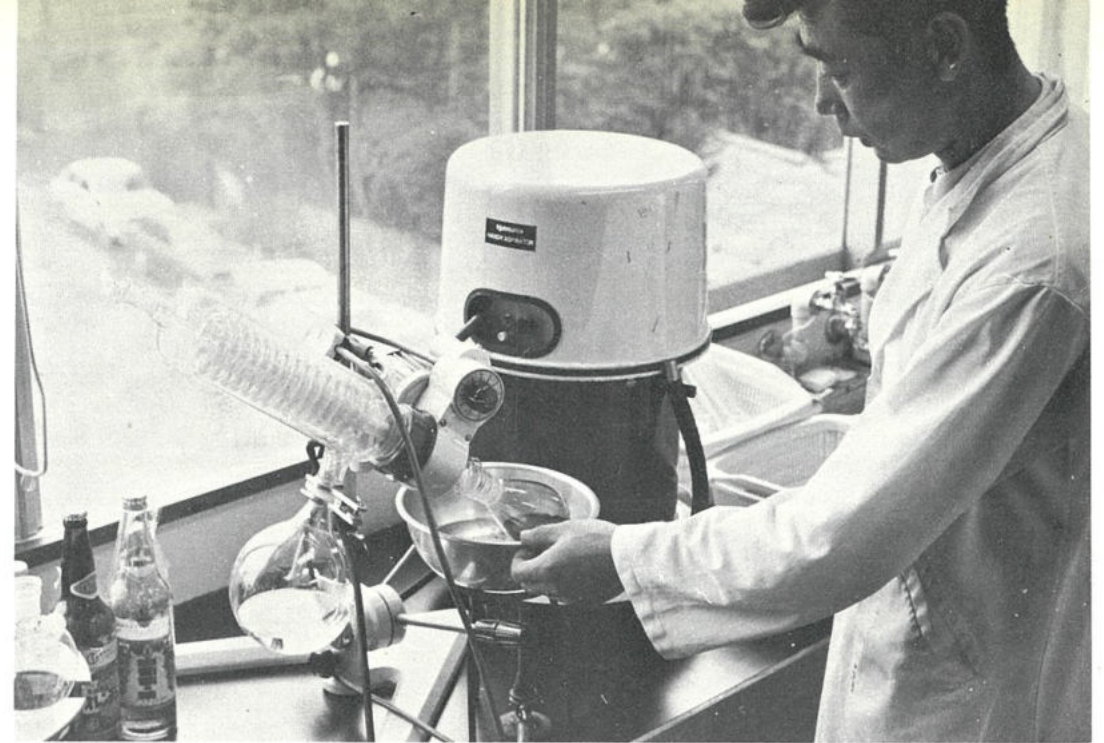




北上川の水質調査。代表河川の清流再現が期待される。



零下80度まで下げられるという無菌室。小児マヒ・カゼの病源であるビールスの検査に威力を発揮する。



チクロ・防腐剤と依頼の多くなった食品添加物の検査。業者、販売店などが積極的なのは喜ばしいが、さばくのが大変とうれしい悲鳴の飯岡食品衛生部長。

日本脳炎蔓延予測調査のためガチョウから採血する谷藤細菌検査部長。今年はゴイサギ、ウミネコの調査も予定している。



公害だ、不良食品だと我々をとりまく環境は年ごとに悪化していく感のする最近、ここ県衛生研究所（盛岡市内丸県立中央病院隣）は、これら予防医学を担当し、調査研究などに励んでいる。

細菌検査部、化学試験部、食品衛生部庶務部の四部からなり、主な仕事の内容は、日本脳炎の発生予測など伝染病の予防。食中毒の防止。水質調査。大気汚染騒音の調査。それに農薬残留調査。貝類の毒生調査など。また、さきごろ沢内村で土中からボツリヌス菌を検出し、分布状態を示したのもその一つ。

それに、最近の世相を反映してか、多くなった食品検査の依頼など、一般依頼

として持ちこまれる各種検査を加えるとその範囲は広く、多岐にわたる。

特に、今年は何体の年。伝染病や食中毒が発生しては大変と、所長以下十五名の職員は苦労はひとしおである。

病気になるのを治すのが病院なら、衛生は病気になるようにするのが仕事。一層重要なはずであるが、「とにかく、県民のみなさんに衛生を知ってほしい」というように、とくなくおざりにされがちな予防医学。

「内政の年といわれる七十年代で、私達の役割は益々重大となるでしょう」と中野所長がいうように、衛生に期待するところは大きい。



カドミウムのような液体中の金属元素等を千億分のニグラムまで正確迅速に検出できるという「原子吸光分析装置」。気体用のガスクロマトグラフと合わせ、公害等には一大威力と佐藤化学試験部長。